連載100 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（66歳・内科）

おどろきの再会は12年ぶり！
それは本シリーズ連載①で紹介した
「腰痛の女性患者さん」でした。

平成28年5月中旬ごろ、某介護施設から、新しい患者さん（女性）のかかりつけ医を依頼されました。

私の代診医と看護師が伺ってみたところ、彼女が突然「支那（しな）の人間だったらお断り！」と叫んだのだそうです。彼女の病歴を確認してみると、12年前に、合併症悪化により当院から高度機能病院へと転院された方でした。その後、老人病院から中間施設へと移り、そして今回の介護施設での再会となったのでした。

彼女は、認知症が進行しており、寝たきり状態にあります。残念ながら、初診の平成11年ごろから5年間、かかりつけ医として往診した私のことは、すっかり忘れてしまっているようでした。

かかりつけ医だったころに彼女から聞いた話を思い出してみると、その昔、満州へとお隣のご主人と愛の逃避行をし、一時は幸せだったようです。しかしながら、敗戦でやむをえず病気療養中の彼を現地に残し、後ろ髪を引かれる思いで、命からがら単身日本へ帰って来たのだそうです。その時、朝鮮人の友人に大金を渡し、彼の看病をお願いしてきたとも言っていました。連載①でも書きましたが、私は「彼とは将来きっと天国で会えますよ」と言うのが精いっぱいだったと記憶しています。

今回彼女が発した「支那の人間だったらお断り！」のフレーズは、まるで魂の叫びのようでした。当時の彼女に何があったのか詳しくはわかりませんが、一生の心残りといったものが彼女にあるのだということは、わかるような気がします。

現代の脳機能研究では、今回のような記憶アンバランスは、ある程度解明されています。

人間の生死に関わるほどの感情の揺さぶりは、脳の奥深い海馬という部分に、しっかりと刻印されるのです。

私自身も振り返ってみると、本シリーズ連載⑭で紹介させていただきましたが、後輩の水死に対し真摯（しんし）に向き合う、わが家のかかりつけ医の姿が今も、まぶたにはっきりと浮かび上がります。脳裏にしっかりと焼きついているのです。

外来診療（かかりつけ医） 要予約
総合内科・漢方診療科
お医者さんが来てくれる
24時間・365日体制で対応（松山市全域）
私たちは、質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 22名
（常勤8名、非常勤14名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 2名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！
Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する 臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/